



写真はハウススイカの育苗風景

— 特集 —

系統共販で伸びる “熊本野菜”

大阪の人口は、昭和四十年から四十三年までを眺めて見ると年に二・三%の範囲で増加しているが、一方、野菜全体の入荷量は、五〜七%と人口増加を上まわっている。価格の面においても、五〜一五%程度の上昇をみていることは、単に経済の成長ばかりではなく、需要の増加に起因するものと思われる。しかし、入荷量や価格においては、年によっては、品物や時期により変動が大きいということも言える。

これからの野菜需要の伸びは極度には期待できないが、現状ベースの伸び方はここしばらく続くものと思われる。そして、今後は、消費者の嗜好性、食生産の改善などの変動により品目間の需要の増減は著しくかわるものと思われる。従ってこのような消費傾向のなかでは、現在供給している産地が、都市化の進展、連作障害、作付の転換などにより変動し、供給産地が移動することは明らかであり、いずれの産地が、いち早く産地化を進め、市場競争に対処できる体制を整備するかが、産地発展のキメ手になるものと思われる。

産地の大型化と 計画共販を

市場をとおしてみた場合の県産野菜に対する期待品目としては、根菜類では、だいこん、にんじん、ごぼう、さといも、洋菜類でレタス、セロリ、果菜類がトマト、きゅうり、なす、かぼちゃ、ピーマンそのほか、果実では早出しのすいか、こだますいか、プリンズメロンやいちご、豆類では、グリーンピース、さやえんどう、いんげん、いも類といったところ。

要望としては、県産野菜の名京阪市場に対する出荷量はまだ十分でなく、産地の大型化、計画共販による市場占有率の向上につとめてほしい。出荷にあたっては、市場の販売能力を考慮して、小さな市場には混載などによりコンスタントに出荷する必要があると思われる。

(熊本県大阪事務所・古場芳孝)

駐在員の

MEMOから



〈東京〉 PRと輸送問題の 検討を

東京の卸市場における生鮮食料品の需要は、東京を中心とした首都圏の人口集中に伴って年々伸びており、その中でも特に野菜については、入荷量がかかり増大しつつある。これは、野菜は量的な面だけ満足

れば良いということであったのが、生活の変化(新鮮でも栄養価が高く、調理が簡単で直接的なもの)により品質を重視する傾向を示し、より新しく改良された品目が好まれるという消費の高度化、多様化へ移行しつつある。

京浜地区における熊本県の野菜の伸びはこれからというところで、果実に比べてまだ低調。品目別に見ると、トマト、レタス、かぼちゃは計画量に充たない状況である。しかし生産量から考えて、輸送問題さえスムーズに解決されれば、現在の消費などの伸びからして充分期待できる品目がある。熊本県関係では、きゅうり、トマト、かぼちゃ、レタスなど、従来のものについては、栽培技術、包そり、荷造り、選果と生産指導面、出荷方法、市場までの流通指導、販売面やPRなど一連の計画指導が更に検討されることが望まれ、市場から見ても相応な期待が寄せられている現状からしても、この問題は大きな課題と言えそうである。

また、激しい人口推移からしても前記した品目について(年間とおしての出荷は困難と思われるが)競合県を研究し、現在の量より二〜三倍増加しても、品質さえ良ければ見とおしは非常に明るいと思われる。

なお、熊本野菜の問題点についてメモ風にふれてみると、まず、腐敗果の防止……レタスの腐敗現象が目立ったが、これは輸送に問題があり、低温輸送車の使用も必要。次に選果別の徹底……県下の農協別品目を見ると格差がまだある。そのため、外観で不利になることがある。規格の統一にもうひとがんばりが望まれる。さらには継続出荷……仲買、小売からの要望を集約すると、熊本野菜の個々の品目は決して他県には劣らないが、計画量を一定期間連続して販売することができ